

→作家たちが惹かれ描いた芦屋の一面で
2021.10.10 (日) カルチャーウォーキング
関西文学散歩 第 562 回 参加報告

『ミーナの行進』。この本の装幀も挿絵も乙女心をくすぐるようで美しい。小説の作者、小川洋子さんを投影したかのような朋子と、従妹のミーナこと美奈子、二人の少女の心の交流に、その当時の芦屋の風景描写がからみ、これは作家がその地に生活し足で回ったからこそのものであろう。横井さんは小説破りの小説(井上ひさし評)といわれたが、純文学独特の難解さはなく、読みやすく、装幀もなつかしさを感ずる色合いで、手元におきたい一冊である。



芦屋神社①



芦屋神社②

小説の中で女性ならではの視点を感じるのは、美奈子がうまれたとき、両親からプレゼントされたであろうドイツ製のレース飾りのついた乳母車や、その中のクッションにも Minako と刺しゅうが入っていたとある。朋子がミーナのために通った芦屋市立図書館もファンなら訪れたい場所だろう。

小川洋子は岡山出身で子供時代、世界少年少女文学全集に読みふけり図書館に入りびたりだったそうで、中・高とどの女子グループにも属さなかった、とある。

1988年デビューしてすぐ海燕新人文学賞、そして2年後には「妊娠カレンダー」で芥川賞を受賞している。その後はキラ星のごとくの活躍である。作品が外国で翻訳されているのは、日本の女性作家ではトップで海外で注目されているようだ。

最近、ノーベル文学賞の発表があったが、今回も村上春樹の名はなかった。彼も西宮・芦屋に住んだこともあり、いくつかの作品の中でその場所を特定できることもあるようで、芦屋市立図書館あたりを巡るファンも多くいるらしい。

カズオイシグロのあとにつづく日本の作家は小川洋子ではないか？ と横井さんは予想されていた。皆さんのご意見もきいてみたいものだ。



芦屋山手小学校

< 田原由美子 >